

貝塚市埋蔵文化財調査報告 第52集

# 沢共同墓地遺跡発掘調査概要

1999. 3. 31

貝塚市教育委員会

# 沢共同墓地遺跡発掘調査概要

1999. 3. 31

貝塚市教育委員会

# はじめに

沢共同墓地遺跡は本市中央部を流れる近木川左岸に位置する古墳時代から中世にかけての遺跡であります。周辺には弥生時代から続く集落跡である沢遺跡、中世の集落跡、戦国時代の城跡である沢城跡等が存在しており特に中世の遺跡が集中している地域であります。

今回、調査のメスが入り、本遺跡の歴史を明らかにする機会に恵まれ、また、本調査概要報告書として刊行するはこびとなりましたことは、過去の人々の暮らしを明らかにすることにおいて有意義なことと考えます。

本書の刊行にあたりまして、皆様の文化財に対するご理解を深めていただくとともに、文化財の保護、保存、研究の一助となれば幸いに存じます。

なお、調査並びに本書作成にあたり、関係者各位には多大なご理解、ご協力をいただき、ここに深く感謝申し上げますとともに、今後とも本市文化財保護行政に対する一層のご理解とご支援をお願いする次第であります。

平成11年3月31日

貝塚市教育委員会

教育長 福井 昱彦

# 例 言

1. 本書は大阪府貝塚市沢890他地内において実施した地下通路建設に伴う事前発掘調査の概要報告書である。
2. 確認調査は平成9年9月10日、発掘調査は平成9年12月9日から平成10年3月6日にかけて実施した。内業調査については本書刊行をもって終了とする。
3. 調査にあたっては、片山工業株式会社より多大な理解と協力を得た。記して感謝の意を表す。
4. 発掘調査は貝塚市教育委員会社会教育課文化財係、学芸員三浦 基が担当した。  
現地・内業調査及び本書作成にかかる諸作業については、下記の諸氏の参加を得て実施した。  
奥野 洋一            文野 雅歳
5. 本書の執筆・編集は三浦が行った。
6. 出土遺物、調査記録は貝塚市教育委員会にて保管している。

# 目 次

はじめに

例 言

目 次 (本文目次、図版目次、挿図目次)

第1章	調査に至る経過	1
第2章	位置と環境	3
第3章	調査成果	4
	1. 調査の概要	4
	2. 各遺構面の状況	4
	3. 包含層の出土遺物	11
第4章	ま と め	13

## 図版目次

- 図版1 検出遺構  
1. SD-403、貯水槽 2. 同上
- 図版2 検出遺構  
1. 調査区 西部 畦畔検出状況 2. 調査区 中央部 畦畔検出状況
- 図版3 検出遺構  
1. 調査区 中央部 畦畔、足跡検出状況  
2. 調査区 東部 畦畔、足跡検出状況
- 図版4 検出遺構  
1. 調査区 中央部 平行畦畔、足跡検出状況 2. 同上
- 図版5 検出遺構  
1. 調査区 西部畦畔 2. 同上
- 図版6 出土遺物  
第4層(27~34)、第5層(8、35、36)出土遺物
- 図版7 出土遺物  
第6層(7、9、11、12、21、37~44)、第7層(15、17、22、45~47)出土遺物
- 図版8 出土遺物  
青磁 第2層(62)、第4層(57、60)、第6層(54~56、58、59)、第7層(49~53)、第11層(48)、遺構検出時(61)  
瓦 SX-301(65、66)、SD-404(64)、SD-504(63)、第9層(68)、第11層(67)出土瓦

## 挿図目次

- 図1 貝塚市遺跡分布図
- 図2 調査地位置図
- 図3 基本土層柱状図
- 図4 調査区地区割図
- 図5 調査地変遷図(第1遺構面~第7遺構面)
- 図6 第7遺構面遺構配置図
- 図7 SD-403(1)、SD-504(2)、SD-701(3)出土遺物
- 図8 包含層第2層(4)、第4層(5、6)、第5層(8)、第6層(7、9~12、21)、第7層(13~20、22、23)、第9層(24~26)出土遺物
- 図9 明治期調査地周辺図

## 第 1 章 調査に至る経過

貝塚市沢地内にて平成 9 年度府道 29 号線（臨海線）延伸を考慮し大規模店舗建設の計画があり、臨海線から開発地へのアクセス道として地下道を建設する計画がもちあがった。建設事業主体者である片山工業株式会社から埋蔵文化財発掘届出書の提出があった。

地下道建設地の東側は一部沢共墓地遺跡内に含まれるものの、西側は範囲外に当たり、事前に試掘調査を行ない、その結果によって遺構の状況を把握した上で開発地域において埋蔵文化財の取扱について協議することとなった。

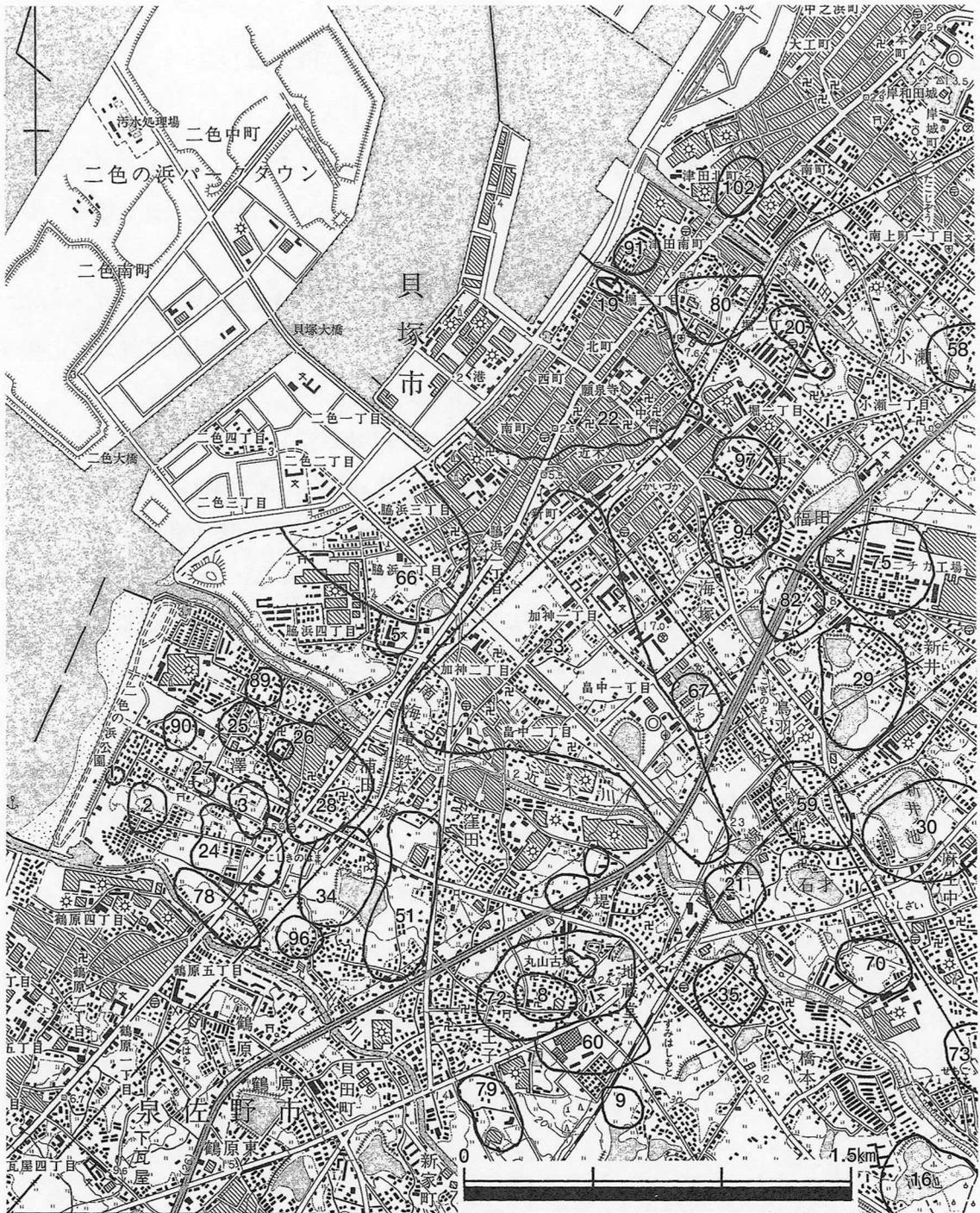
試掘調査は平成 9 年 9 月 10 日に実施した。調査対象地内の東西に 1 ヶ所ずつ設定し、東側を第 1 区（約 2.2×10m）、西側を第 2 区（約 3×8 m）として実施した。調査面積は約 42m<sup>2</sup>である。

その結果、第 1 区について土師器小皿や瓦器碗、青磁碗などの中世の遺物が出土し、中世の遺物包含層が良好に存在することを確認し、溝等の遺構も検出した。第 2 区については、近代以降の工場建設において、大幅な攪乱を受けているとともに、旧浜地の砂層堆積を確認したため、遺跡は存在しないと考えられた。開発地において遺構が存在すると推定される東側の範囲について開発において破壊される部分について発掘調査が必要であると判断した。今回の試掘調査によって、従前の範囲外に遺跡が広がることが明らかとなったため、遺跡発見届出書の提出を求めた。

この結果をもとに協議を重ねた結果、地下道掘削によって大幅に掘削される東側部分において 2 次発掘調査を実施するとの合意をみた。

その後、遺跡発見届出書が提出され、沢共同墓地遺跡の範囲拡大登録を行った。

発掘調査は平成 9 年 12 月 9 日から平成 10 年 3 月 6 日にかけて実施した。調査面積約 800m<sup>2</sup>である。



1. 沢新出遺跡 2. 沢海岸遺跡 3. 沢遺跡 5. 長楽寺跡 7. 丸山古墳 8. 地藏堂廃寺 9. 下新出遺跡  
 16. 河池遺跡 19. 泉州麻生塩壺出土地 20. 堀遺跡 21. 橋本遺跡 22. 貝塚寺内町遺跡 23. 加治・神前・  
 畠中遺跡 24. 明楽寺跡 25. 沢共同墓地遺跡 26. 沢西出遺跡 27. 沢海岸北遺跡 28. 沢城跡 29. 新井・  
 鳥羽遺跡 30. 新井ノ池遺跡 34. 澱池遺跡 35. 積善寺城跡 51. 窪田遺跡・窪田廃寺 57. 堤遺跡 58. 小  
 瀬五所山遺跡 59. 石才遺跡 60. 王子遺跡 66. 脇浜遺跡 67. 今池遺跡 70. 石才南遺跡 72. 地藏堂遺跡  
 73. 名越西遺跡 75. 新井・鳥羽北遺跡 78. 沢西遺跡 79. 王子西遺跡 80. 津田遺跡 82. 福田遺跡 88.  
 堤三宅遺跡 89. 沢新開遺跡 90. 沢タナジリ遺跡 91. 堀新遺跡 94. 堀秋毛遺跡 96. 沢老ノ塚遺跡 97.  
 東遺跡 102. 津田北遺跡

図1 貝塚市遺跡分布図 (部分)

## 第 2 章 位置と環境

沢共同墓地遺跡は古墳から室町時代の遺物散布地であり、中世から現代まで続く墓地を有する遺跡である。調査地は市内を流れる近木川南岸の河口部分、南側約200mに位置している。周辺部の調査としては調査地に近接する沢新開遺跡が存在し近木川の氾濫による砂礫の堆積する状況であり耕作灌漑用の井戸を検出しているが川の氾濫によって埋没しており耕作には不向きな状態であり、また開発も近世以降に畑作を行う程度であったことが確認されている。西側には海水浴でにぎわう砂浜で知られる二色ノ浜がある。和泉名所図絵等で見られる浜辺の松林は現在も見られ、関西国際空港のアクセス道路として多く利用される阪神高速湾岸線、その下を平行して走る臨海線（府道29号線）と旧国道26号線（大阪堺南阪南線）等の道路整備が進み交通環境の変化が著しい地域である。

地形は海方向に向かって緩やかに傾斜する海岸段丘端部分にあたり、本調査地は段丘下部分の標高2～3mを測る地点に位置する。現在では砂浜部分から100m以上離れているが、過去には西側の海の影響を多分に受けていることが推測され、その結果として海岸の砂堆積は上層部のみの地域と比較的深く広範囲に広がっている2つの状況に分けられる。

周辺の遺跡として海岸部周辺には弥生土器の散布地である沢新出遺跡、沢海岸遺跡がある。中世の遺跡は本地域において多く存在している。戦国期の城跡である沢城跡、集落遺跡としては沢遺跡、沢タナジリ遺跡、沢西遺跡などである。

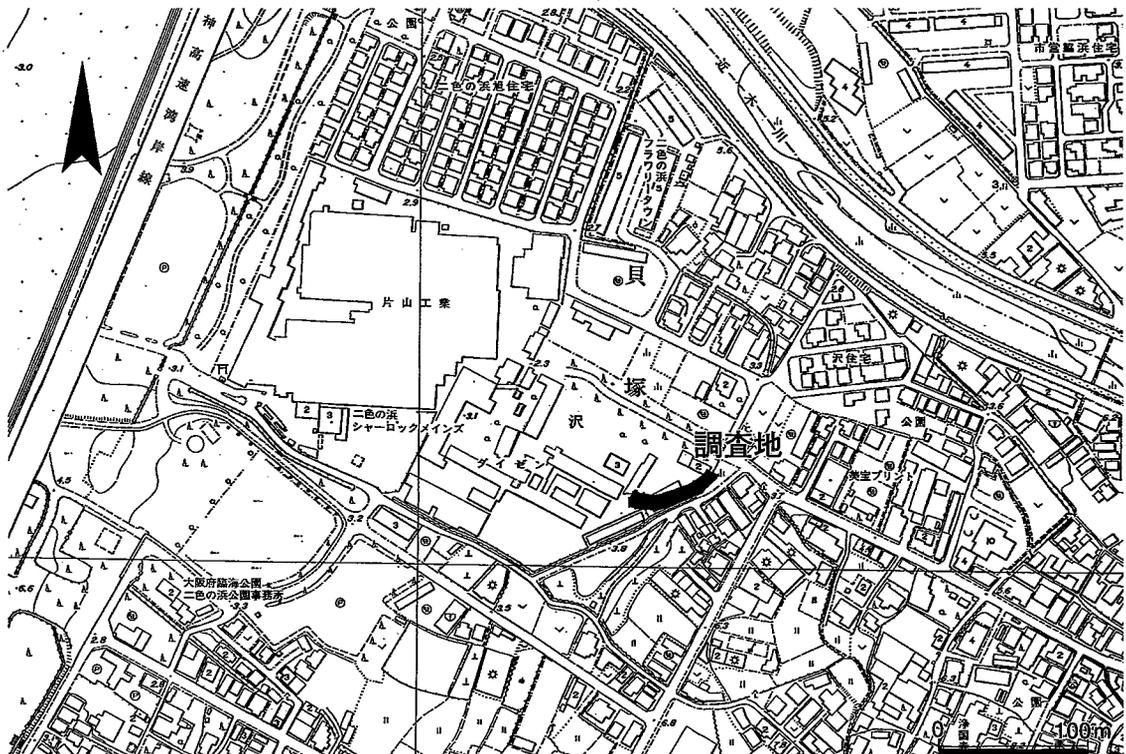


図 2 調査地位置図

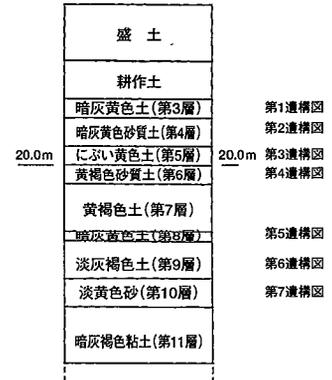
# 第 3 章 調査の成果

## 1. 調査の概要

調査は開発により破壊を受ける部分約600㎡の調査区を設定して行った。調査区は国家座標に基づいて5m×5mの区画を設定し東西方向にA～L、南北方向に1～9の名称をあたえた。

### 基本層序

調査区の地層の状況は上から、盛土(1.4～0.4m)、耕作土(20cm)の下に遺物包含層が堆積する。暗灰黄色土(第3層)、暗灰黄色砂質土(第4層)、にぶい黄色土(第5層)、黄褐色砂質土(第6層)、黄褐色土(第7層)暗黄灰色土(第8層)、淡黄色砂(第10層)、暗灰褐色粘土(第11層)、地山は暗灰色砂礫層で遺構面は第3層から地山上面の7面で検出した。



暗灰黄色砂礫層(自然層) S:1/40

図 3 基本土層柱状図

## 2. 各遺構面の調査概要

それぞれ、上層より第1遺構面から第7遺構面とする。以下、各遺構面ごとに概要を説明することとする。

### 第1遺構面

耕作に伴う鋤溝(SD-101、SD-102)を検出した。埋土はともに耕作土で幅は約0.5m、深さ0.1mである。また、調査区の東側で検出した(SX-101)、検出長0.4m、深さ0.1m

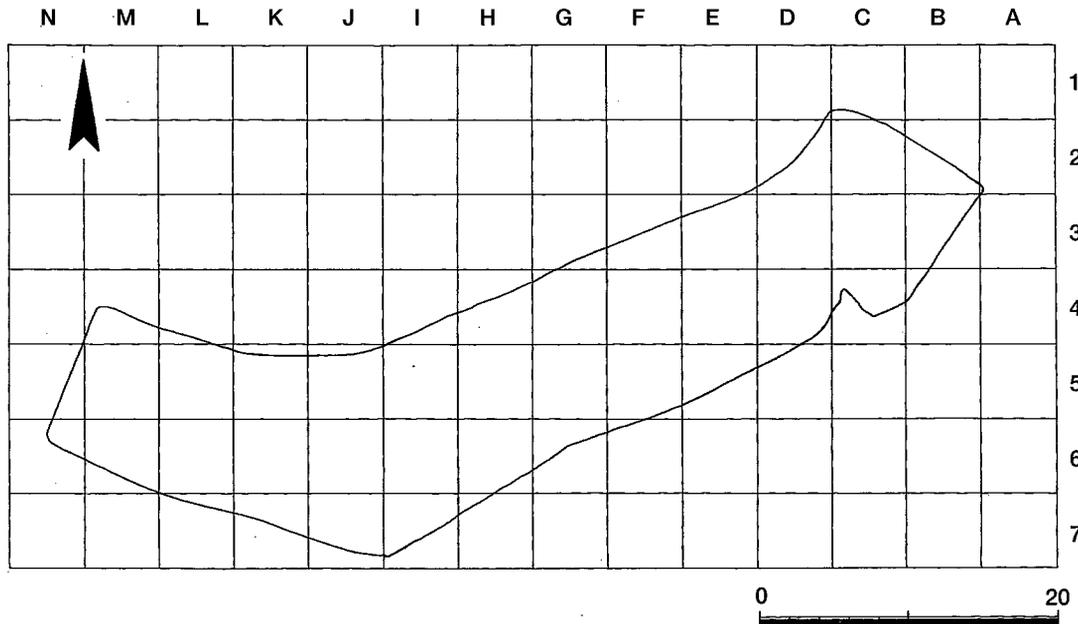


図 4 調査区地区割図

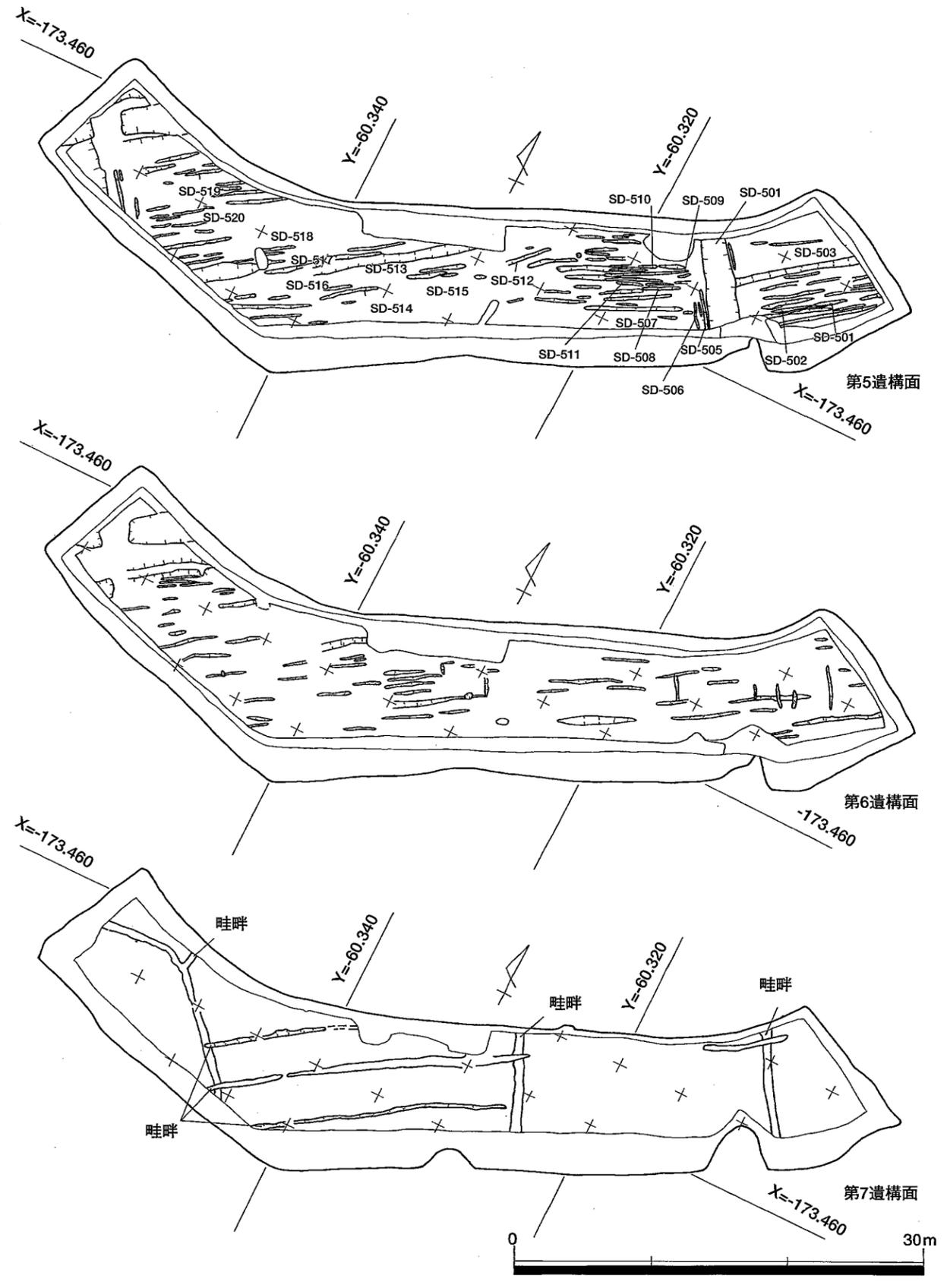
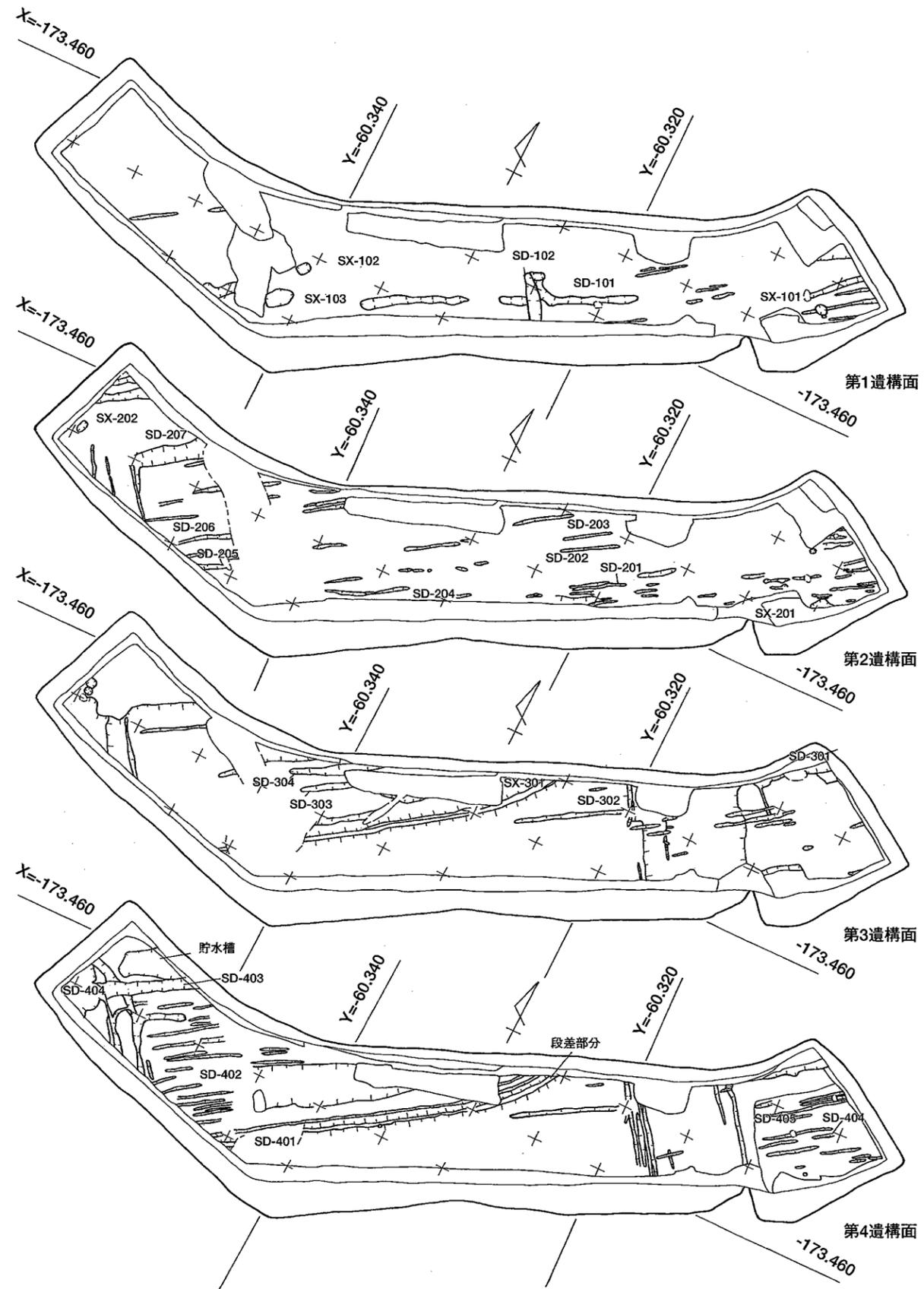


図5 調査地変遷図 (第1遺構面~第7遺構面)

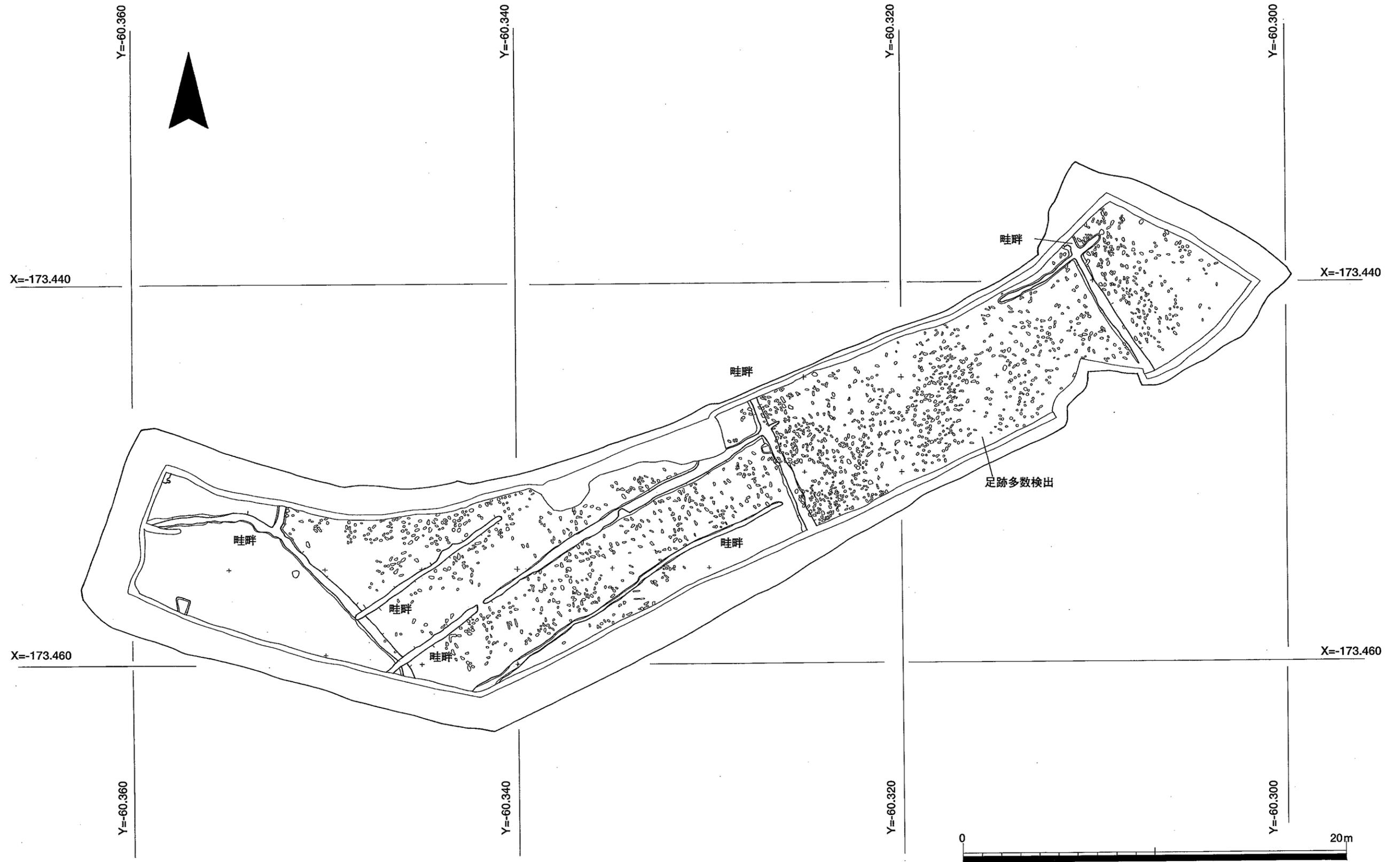


図6 第7遺構面遺構配置図

の南西側で土坑を検出した。長軸1.0m、短軸0.7m、深さ0.8m、埋土は耕作土のSX-102は桶を埋めていた形跡が見られ、貯水槽の可能性はある。長軸2.1m、短軸1.2m、深さ0.4mのSX-103は、埋土が耕作土と黄色砂と混じりあう状況であり、耕作に伴う土取りを行ったと考えられる。織物関係の工場と寮があったことがわかっておりその部分から出たビン、茶碗、皿などを廃棄したごみ穴が多かった。茶碗、皿には瀬戸焼の国民食器が含まれるため戦時中、戦後以降に廃棄されたと考えられる、検出遺構は造成以前のもので近代のものである。

## 第2遺構面

調査区のほぼ全域で鋤溝(SD-201~SD-207)を検出した。埋土は旧耕作土である暗灰黄色土で幅約0.2m、深さ0.1mである。方向は北東-南西方向で段丘の段差の方向に平行している。調査区西側では海岸部からの砂と考えられる堆積部分が見られる。黄色粘土と砂の混合土を使用して地盤の踏み固めてし、水田として利用していたと考えられる。また、調査区西端部分で溝を2条検出した。北東-南西方向で鋤溝と方向が一致する。灌漑用の溝と考えられる。遺物は陶磁器片が出土しており江戸時代後半以降の時期のものである。

## 第3遺構面

調査区中央部において段差を検出した。段差は北東南-西方向でやや北側に弓なりになる。段差は北西方向に約0.3m下がっており、この段差部分は山側(南方向)から流れ込んだ土砂の流入と人為的な整地作業によって埋められ平坦な状態になったと考えられる。調査区東側ではこの平坦になって以後の鋤溝(北東-南西方向とこれに直交するSD-302)と段差の方向に影響される鋤溝(SD-303、SD-304)の2種類を検出した。

SD-302は水田区画端と考えられる鋤溝で検出長0.3m、幅0.2m、深さ0.1m、埋土にぶい黄色土である。

SD-303、SD-304は東北-西南方向のもので、埋土は黄褐色土とともに幅0.4m、深さ0.15mである。

調査区北東隅部分では東西方向に流れる灌漑用溝(SD-301)を検出している。検出長5m、幅1.5m以上、深さ0.6mの規模である。遺物は土師器片、瓦器片などの中世の土器が出土しているほか、江戸時代の陶磁器も出土している。遺構の時期は江戸時代の後半頃のものと考えられる。

## 第4遺構面

中央部段差部分の土を取り除き遺構検出を行った。段差下に段差に平行する溝(SD-401)、東北-西南方向の鋤溝多数を検出した。調査区西側では幅0.9m、深さ0.4mの東北-西南方向に流れる灌漑溝(SD-403)とこれに交差する溝(SD-404)がある。

また、調査区南西隅部分で検出した長辺5m以上、短辺1.7mの貯水槽(SX-401)と見ら

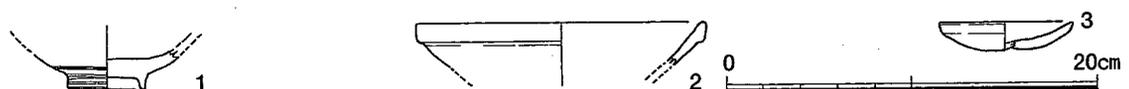


図7 SD-403(1)、SD-504(2)、SD-701(3)、出土遺物

れる土坑を検出した。同様の目的で掘削したと考えられる土坑（SX-402、SX-403）は2箇所を検出している。遺物はSD-403から肥前染付椀底部（1）が出土している。18世紀後半に位置付けられる。遺構面の時期は江戸時代前半まで溯る可能性がある。

#### 第5 遺構面

東北-西南方向の鋤溝（SD-501、SD-502、SD-505～SD-512、SD-514～SD-520）を多数検出した。鋤溝は幅約0.2m、深さ0.1mで埋土は黄褐色土である。

SD-503、SD-513は鋤溝と同一方向の北東-西南方向と南東-北西方向のSD-504は区画溝の性格の強いものである。SD-503は検出長9.3m、幅0.4m、深さ0.2mで埋土は黄褐色砂質土でSD-504に切られる。SD-513は検出長12m、幅約0.8m、深さ0.3mで埋土は黄褐色砂質土である。SD-504は検出長6m、幅2m、深さ0.2mで埋土は黄褐色砂質土である。出土遺物は復元口径7.6cmの白磁椀（2）が出土している。口縁部は玉縁で12世紀後半に位置付けられる。遺構の時期は中世後期まで溯る可能性がある。

#### 第6 遺構面

調査区南西部で耕作地端と考えられる畦畔を確認した。検出長6m、幅0.5mで高さ0.15mである。この畦畔部分まで東北-西南方向とこれに直交する鋤溝を検出した。幅0.15m～0.4mで深さ0.1～0.25mで淡灰褐色土である。遺構面下の堆積土は淡黄色極細砂混じりシルトで比較的幅広の鋤溝を検出しており地盤が柔らかいため鋤溝規模が短く一定しない。出土遺物は瓦器椀片が少量出土する程度であった。第7調査面以降耕作が一時的不能となり段丘上面からの堆積物によって、また、このが時期に灌漑用水路および貯水槽に相当する施設がつくられることによって耕作が再開したと見られる。耕作は当初水田耕作であったがこの時期に海岸部の砂堆が進み海岸部からの砂が本調査地付近まで押し寄せる状況となったと考えられる

#### 第7 遺構面

暗灰褐色粘土（第11層）上面で検出した遺構で埋土を淡黄色極細砂混じりシルトで人、牛の足跡、水田区画畦と溝2条を検出した。常に湧水している湿地状態のところを水田として使用していたと考えられる。出土遺物は土師器小皿（3）、瓦器椀が出土しており、その形状からこの水田面の時期を推定すると13世紀後半ごろと考えられる。この水田面は上面に淡黄色極細砂混じりシルトが10cm以上にわたって堆積しており、川の氾濫などの原因によって埋まったことが考えられる。水田の状況であるが、牛・馬によって耕作が行われていたことは多数検出した足跡から明らかであるが、人、牛馬の足跡以外に耕作痕は確認できなかった。調査区中央部においては東西方向に約3m間隔で小区画が設定されている。小区画中央部南西側では一部流水部分が設けられている。中央部畦畔は切り合いを有しており南南東-北北西方向に東側、中央部、そして若干方向をかえて畦畔が設けられている。つまり、小区画は後に設定されており中央部および東側の一部については水田が2時期考えられる。西側は沢共同墓地の方向で、地形も舌状に大きく張り出しているため地形変化に対応して畦畔方向が変化すると考えられる。調査区西側は特に湧水が激しく西側端の畦畔はこれ以降上面でも、水田端として残ることとなる。

### 3. 包含層の出土遺物

出土遺物は中世を中心とした遺物が出土しているが細片が多く図示に耐えるものが少ない状況であった。このことは遺構出土の遺物についても言える。遺物包含層は8層にわたっている。以下各層の状況とともに出土遺物の状況について概要を説明する。

#### 第2層（耕作土）

盛土下の耕作土で層厚0.2mで1930年から1940年代にかけて工場労働者の出した廃棄物（化粧ビン、ピン、茶碗）が多く埋めらる状況にあった。出土遺物の中には4のような青磁碗も含まれている。口縁部片で復元口径14.4cm、外面にヘラ切り蓮弁文がみられる。

#### 第3層（層厚0.2、暗灰黄色土）・第4層（層厚0.3 暗灰黄色砂質土）

旧耕作土で江戸時代の遺物を主に含む近世の耕作土といえる。古い遺物としては復元口径10.0cmの白磁小皿（5）、復元口径17.0cmの青磁碗（6）がある。

#### 第5層（にぶい黄色土）

層厚0.2mで出土遺物は少量であるが瓦器碗を含み、復元口径44.0cmの常滑焼、備前焼すり鉢が出土している。

#### 第6層（黄褐色砂質土）

層厚0.2mで瓦器碗、土師皿といった中世の遺物が中心として含まれる。中に含まれる中世以前の遺物としては土師器壺底部（7）かなり摩滅を受けており耕作による混入の可能性が高い。須恵器坏身（12）は復元口径11.6cmでTK-43の時期に位置付けられる。中世の遺物としては9、10、11、21、54～56、58、59がある。

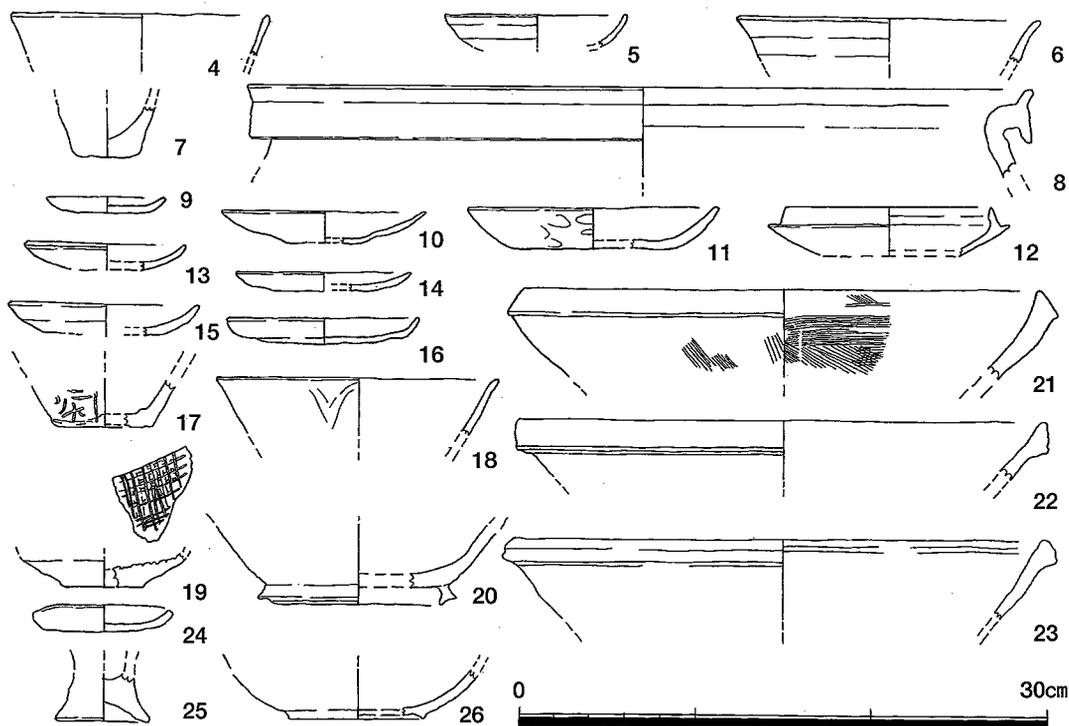


図8 包含層第2層(4)、第4層(5、6)、第5層(8)、第6層(7、9～12、21)、第7層(13～20、22、23)、第9層(24～26)出土遺物

9は口径6.4cm、10は復元口径11.4cm、11は復元口径14.0cmの土師器皿である。21は復元口径29.2cmの瓦質こね鉢である。54～56、58、59青磁椀である。出土遺物全体を通していずれも小片であり耕作地に廃棄されたものや流れ込みの可能性を考えることもできるが第6層、第7層で青磁椀は集中している。時期は13世紀から14世紀に位置付けられる。

#### 第7層（黄褐色土）

層厚0.5mで中世を中心とし、一部奈良時代まで遡る須恵器（17、20）を含む。13は復元口径9.0cmの白磁小皿である。14は復元口径9.8cm、15は復元口径10.8cm、17は復元底部径5.4cmの須恵器壺底部である。外面に線刻で文字を書く数字であろうか。16は復元口径10.6cmの土師器小皿である。19は復元底部径4.4cmの瀬戸陶器おろし皿である。内面にすり目を有する。20は復元高台径11.2cmの須恵器長頸壺の底部である。22、23は東播系須恵器こね鉢である。22は復元口径29.8cm、23は復元口径30.0cmである。49～53は青磁椀である。口縁部を中心としている。時期は13世紀以前の遺物を含むが基本的には中世の時期以上に遡るものでない。

#### 第8層（暗灰黄色土）

層厚0.1mで瓦器椀が少量出土している。耕作による土壌化の比較的底部分であり遺物の混入、巻上げはほとんど起こっていないと言える。含まれる遺物の時期は、主に14世紀後半までの遺物が含まれる。

#### 第9層（淡灰褐色土）

層厚0.4mである。復元高台径7.6cmの瓦器椀（26）は13世紀後半に位置付けられる。土師小皿（24）は口径7.6cmである。製塩土器（25）は復元底部径5.0cmで脚付きのもので7～8世紀代に位置付けられる。製塩土器や蛸壺といった海岸部に多く見られる遺物は近木川北岸の脇浜遺跡で多く出土が確認されている。砂浜が発達した本調査地周辺では砂堆によってそういった遺構や遺物が埋没している可能性も考えられる。時期は、14世紀後半までと考えたい。

#### 第10層（淡黄色砂）

層厚0.3mできめの細かい砂であり本層下面で検出した水田を埋めており、遺物も出土していない。この堆積によって水田耕作は位置時期中断されることになる。（13世紀後半以降）きめの細かい砂であるため洪水砂とは考えにくい。時期は13世紀後半から14世紀前半と位置づけたい。

#### 第11層（暗灰褐色粘土）

層厚0.6m良くしまった粘土であり比較的上層から、上層から奈良時代と考えられる平瓦が2点出土している。下層はほとんど流水を伴わない滞水状態を呈しており遺物等の流入はほとんどなかったと考えられる。そのためこの層の形成時期は不明である。

## 第4章 まとめ

各遺構面において良好な状態で遺構が検出できたことは大きな成果である。特に中世から近代にかけて水田として使用されてきた状況、変遷がわかる資料として良好な成果を得た。

本調査地は段丘端の下部分で平坦面のため土砂の流れ込みが多く堆積土砂が容易に流れ出さない状況から堆積は次第に進み耕作面が上昇する結果となった。そのため調査区中央部に段差を設けたり、埋めて平坦にしたりということが行われていたと考えられる。

第7遺構面の時期は湿地状で排水溝や畦畔を設けて区画をつくることによって水田に必要な水位を確保し耕作を行っていたが、第6遺構面以降は明らかに状況が変化した。近木川から流入する土砂、また大阪湾内の海流によるためであろうか砂浜が発達する状況が作りだされた。浜風の作用もあって海岸段丘下まで砂が侵入する結果となった。それと同時に段丘上から流れ込む土砂が次第に堆積する景観となった。

その対策として段丘上のため池や水路からの灌漑水路を設け、貯水槽を掘削したり耕作をするための工夫が見られる。貯水槽掘削したころ（江戸時代後半）には海岸部から砂が押し寄せる状況は現在も残る松林の植林によって平穏化したと言えるが近木川、見出川によって運ばれた土砂による二色ノ浜の砂浜が発達は進行したといえる。

近接する沢共同墓地との比高差は2 m以上にもおよび集落の西端に地藏堂（集落との境界）その西側に墓地がつくられている。現在の景観では砂堆積との境界部分のやや高い場所に墓地がつくられている状況であるが、本調査から想像される状況は共同墓地が海側に向かってのびる舌状の尾根のように突き出していた部分を一部平坦化することによって整備されていたことが推測される。

海までの距離は砂浜の発達によって変化しているが調査地における第7遺構面の標高はほとんど0 mに近く近木川の氾濫源が広がる状況である。近接遺跡例として「沢新開遺跡」があげられるがわずかに100mの近接するでは河川による氾濫、土砂の流入堆積が多く礫、砂が多くをしめる状況で中世以前はほとんど開発されることなく近世初頭に溜め井戸をつくり畑作を中心とした開発を行っていることは明らかとなっている。一方、本調査区では湿地状を呈し利用可能な場所については水田として使用しており、市内海岸部においては調査例も少なく不明な点が多かった地域といえる。

明治の地形図からわかること

図9掲載の明治18年の地形図からは沢の集落から西、現在の二色ノ浜方向には3本の道が存在し、そのうちの2本は通ずる浜部分に展開する集落（字濱）のものである。浜辺付近の集落は近世以降のものと考えられ比較的遠浅であった浜部分であるが耕作には適さない。

北側の道aは近木川に向かって傾斜する氾濫原との境界部分に走ると考えられ、道の先端部分は砂浜にて曲折する。海岸線と平行し道が存在するがこれより西側（浜側）は砂の堆積と松林が広

がり耕作地としては適さない。

道aは中世当時の状況から考えれば、この道の南側においては本調査の成果から耕作が可能であったといえる。それに対し道a北側の状況は従前の調査である「沢新開遺跡」において近木川の氾濫原である状況を確認していること。また、近世期に川の氾濫によって耕作用井戸が埋没するような状況から耕作に適さず開発も近世以降であることが想像できる。道a～cの間においては現在住宅が立ち並び状況は把握しづらい状況にあるが、東南部の澱池や灌漑用水路によって水が引

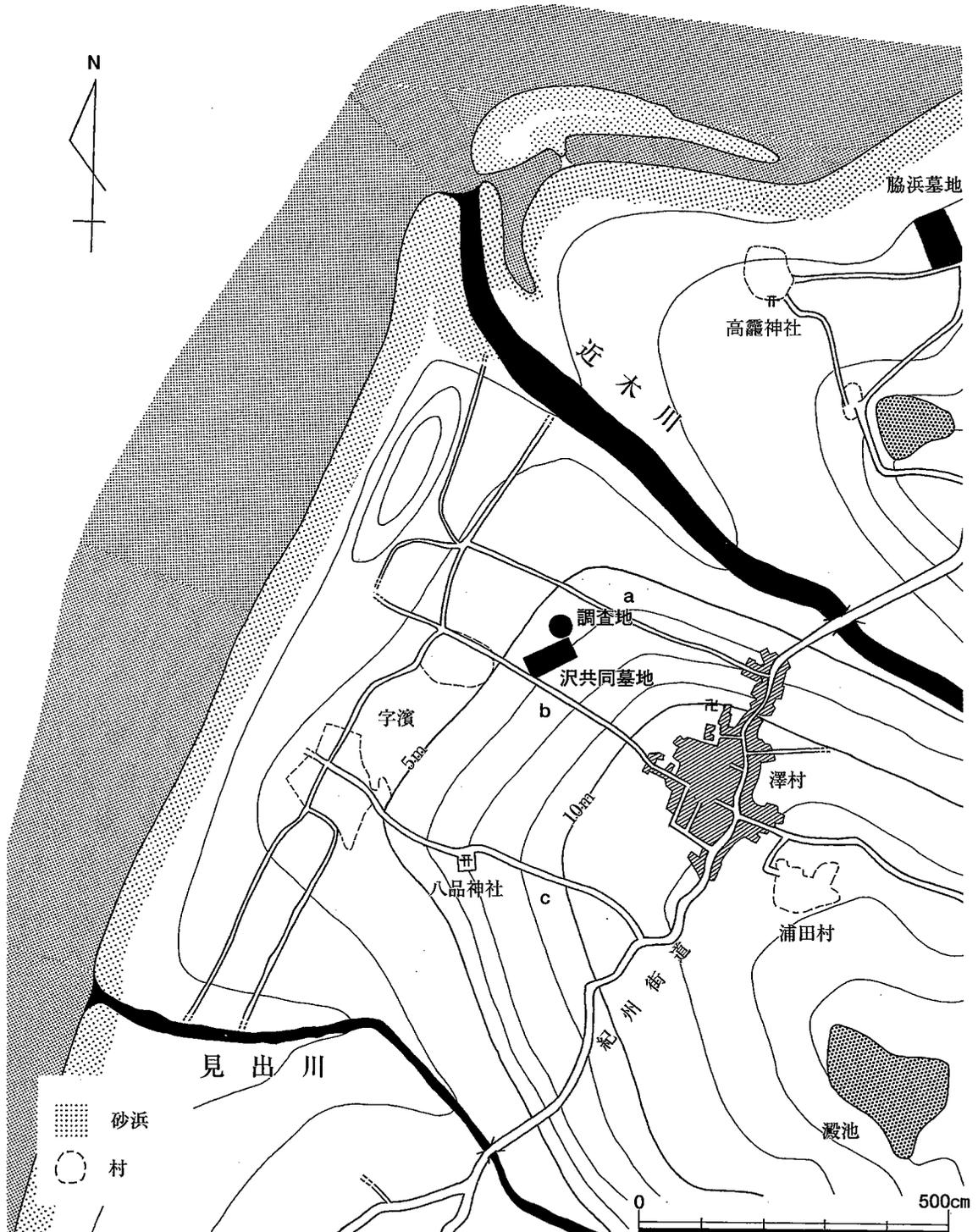


図9 明治期調査地周辺図 (明治18年仮製図を改変)

かれ水田耕作が現在も行われている。

現在の砂浜の景観はいつごろからのものであろうか？古代には近木川、見出川の流れによって運ばれる土砂は比較的少なく特に近木川河口部の砂堆の広がりには少なかったと見られる。海岸段丘下河口部は広範囲にわたって湿地状を呈していたことは周辺部の脇浜遺跡や本調査地などから推測できる。川の流動幅は約200mであり北方向に川は主に破堤、氾濫を繰り返していたと考えられる。堆積物によって川幅の固定化と砂浜の発達の中世以降のことと考えられ、その結果として本遺跡の水田が極細砂によって埋没し一時的に使用不能になった時期と一致する。灌漑用水や貯水槽によって耕作を可能としていた。この水路、貯水槽は海方向からの塩分の影響を和らげる役割も果たしていたと考えられる。

集落から共同墓地に向けては地蔵堂が墓地に向けて2箇所存在し、集落部から海辺にかけて一筋の道が延びる。地蔵堂と墓地の間は道路によって分断されており道路建設に伴って状況の変化も大きいと考えられる。墓地の前には幅2m以下の舗装道路が通じているが中世期の墓地を破壊して通されている可能性がある。本調査中にこの道路周辺で工事が行われているが近世期の蔵骨器及び墓石が掘り出されている。

実際、現在の墓地の範囲と中世期の範囲は部分的には重なるものの近世以降には北方向に向かってひろがりをみせ、さらに段丘部の斜面をに手を加えることによって平坦部を作り出して墓地の拡張が行われている。

現在の状況は、自然海浜の風物とも言える松林の枯れなどによって風防、砂防の役目は薄れ砂が段丘下まで押し寄せる結果となっている。約10年前の沢共同墓地は現状が砂地であり、植物もまばらな状況であった。しかし、周辺部の開発によって砂が土壌化し周辺部の植生にも変化が起こっているようである。この状況もまた、高速の高架建設等によって浜風の方向・強さの変化によるものかもしれない。本調査においては、中世から近代にかけての変遷が良好にわかる成果を得たことが重要であることはもちろんのこと、今後とも過去の歴史を検証しつつ周辺部の状況とともに考察を深めていく必要がある。

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	さわきどうほち いせきはくつちうさがいよう							
書名	沢共同墓地遺跡発掘調査概要							
副書名								
巻次								
シリーズ名	貝塚市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第52集							
編著者名	三浦 基							
編集機関	貝塚市教育委員会							
所在地	☎597-8585 大阪府貝塚市畠中1丁目17番1号 TEL 0724 (23) 2151							
発行年月日	西暦1999年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さわきどうほち 沢共同墓地 いせき 遺跡	おおさかふ 大阪府 かいづかし 貝塚市 さわ 沢	27208	25	34度 26分	135度 21分	19971209 19980396	600	地下道建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
さわきどうほち 沢共同墓地 いせき 遺跡	散布地 墓地	中世～ 近世	鋤溝 溝 畦		土師器 瓦器 陶磁器			

# 版 圖



1. SD-403、貯水槽

北東より



2. 同上

北より



1. 調査区 西部 畦畔検出状況

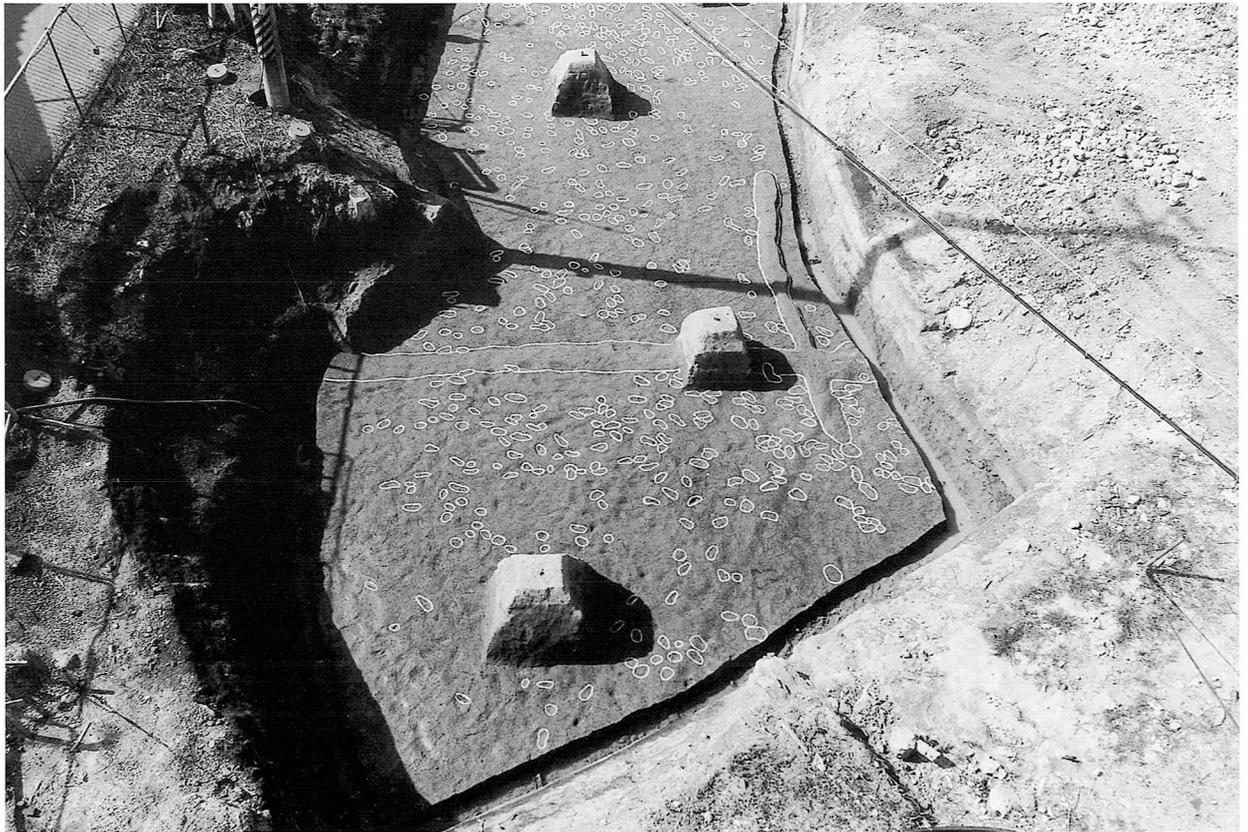


2. 調査区 中央部 畦畔検出状況



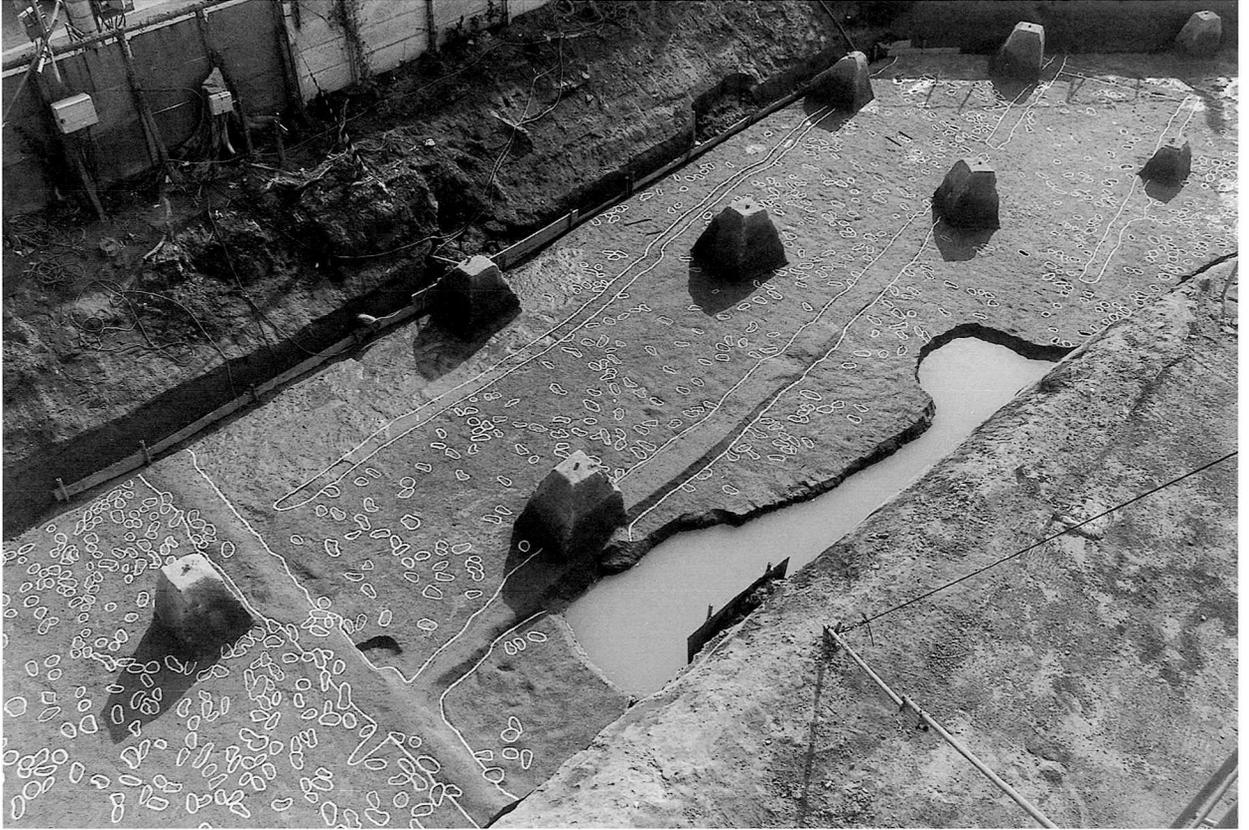
1. 調査区 中央部 畦畔、足跡検出状況

東より



2. 調査区 東部 畦畔、足跡検出状況

東より



1. 調査区 中央部 平行畦畔、足跡検出状況

北より



2. 同 上

北西より



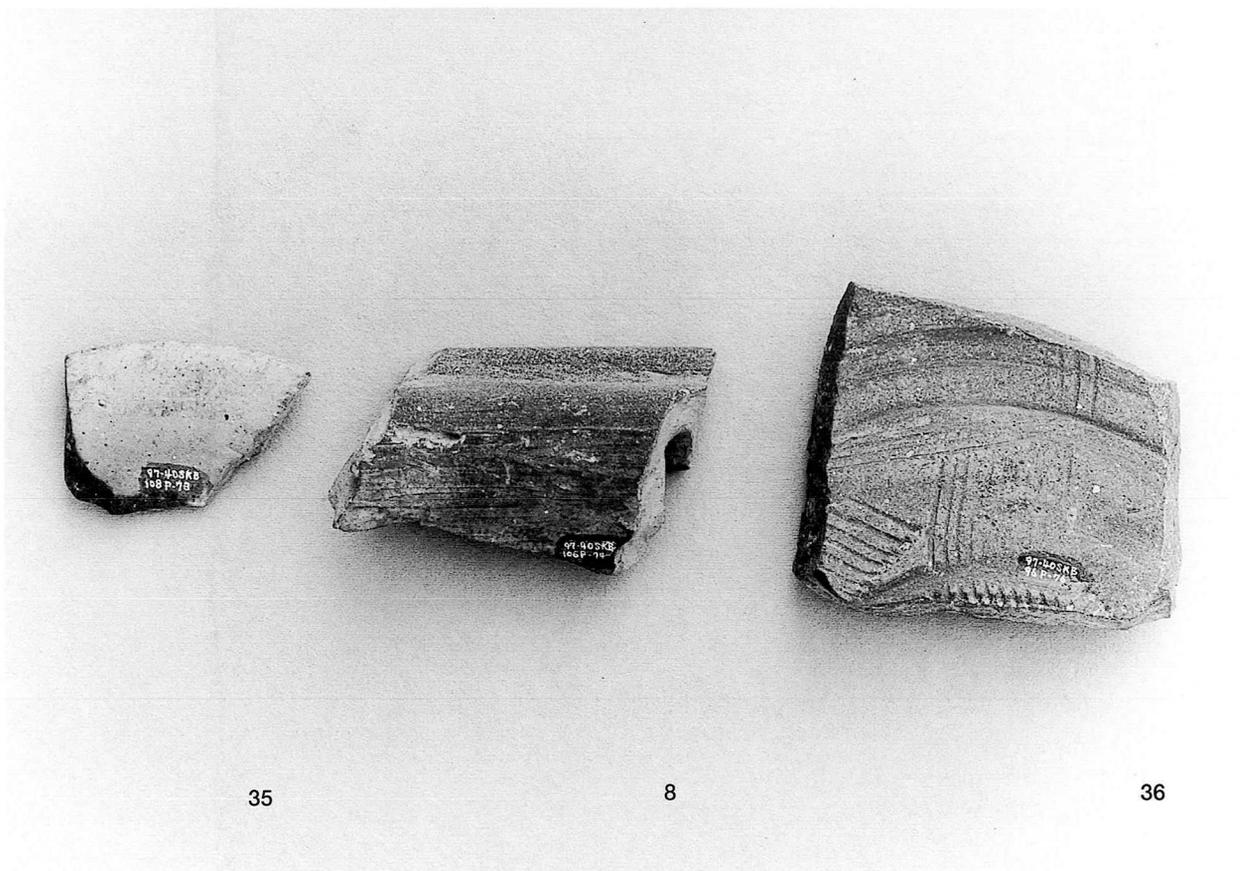
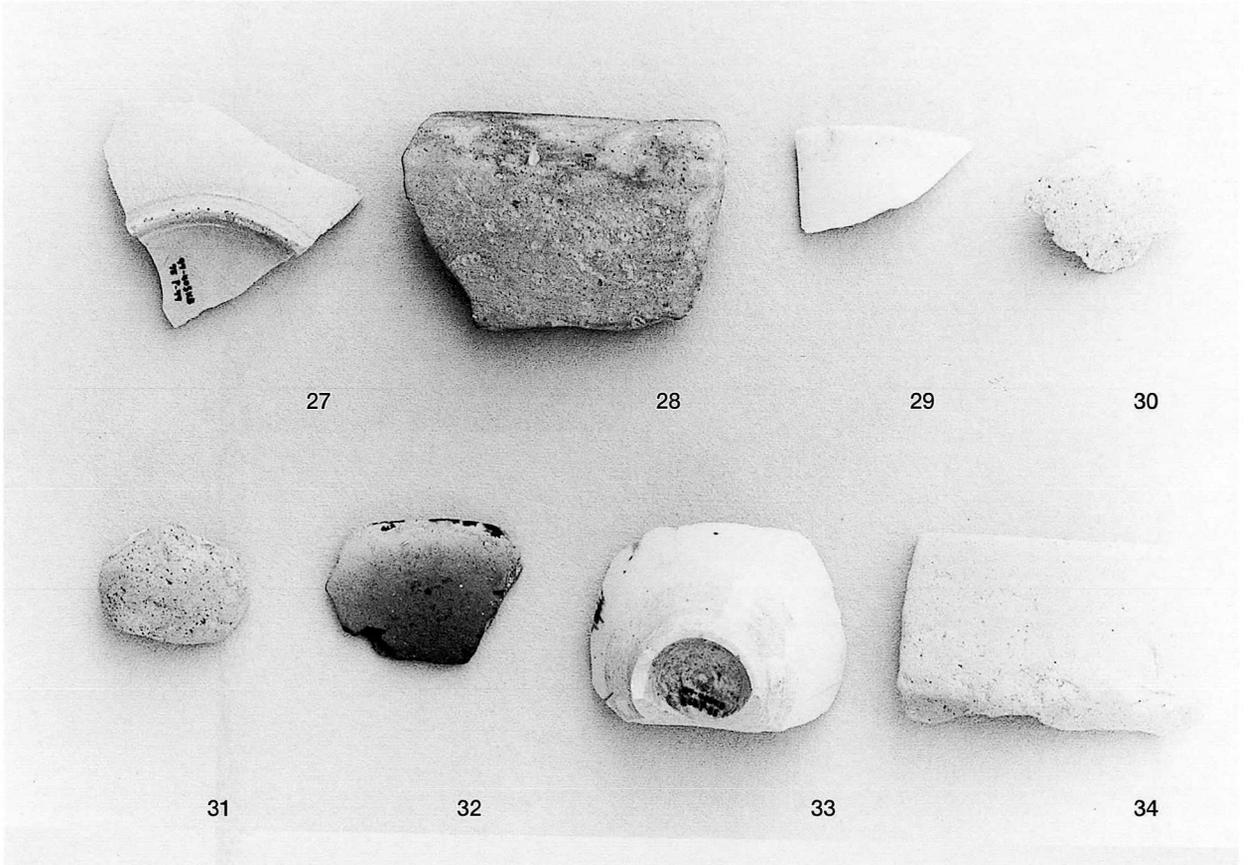
1. 調査区 西部畦畔

北より

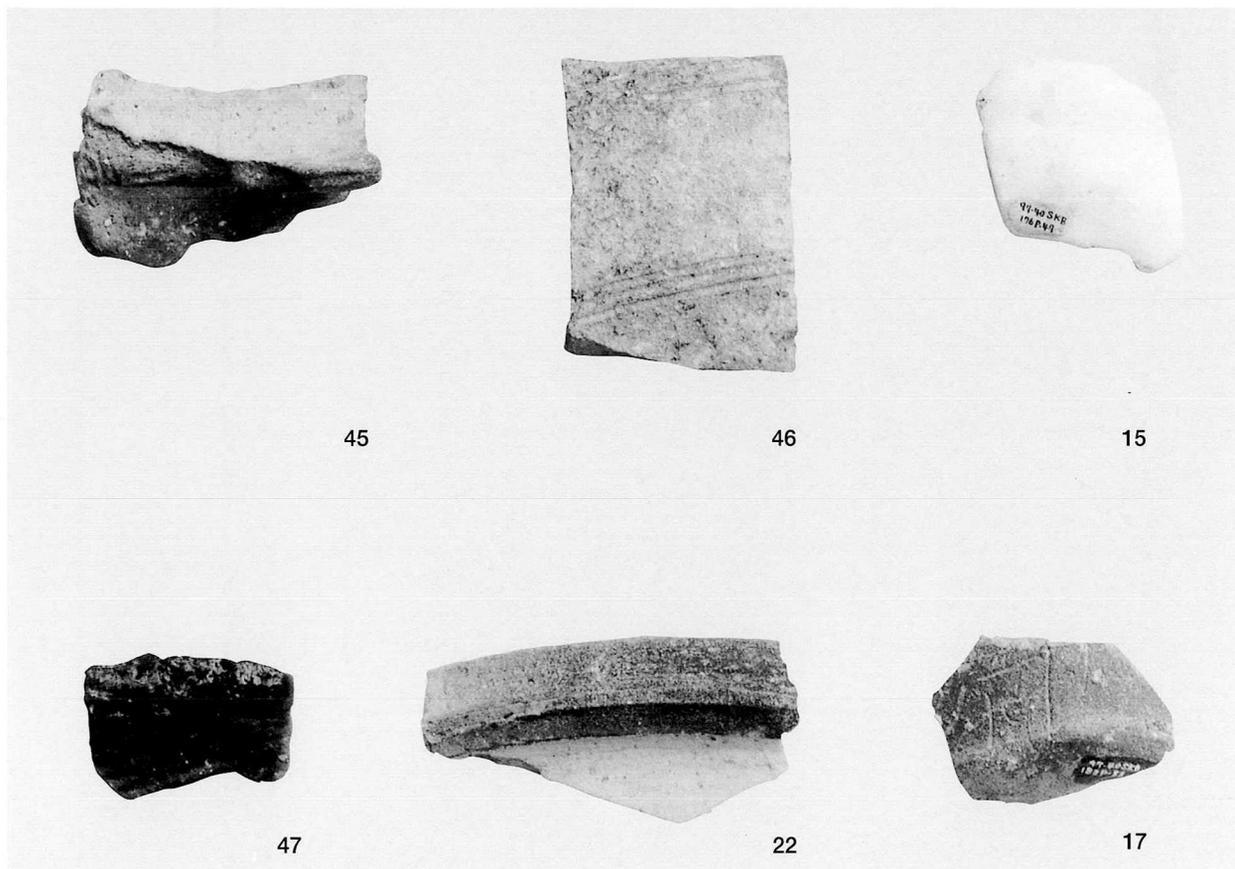
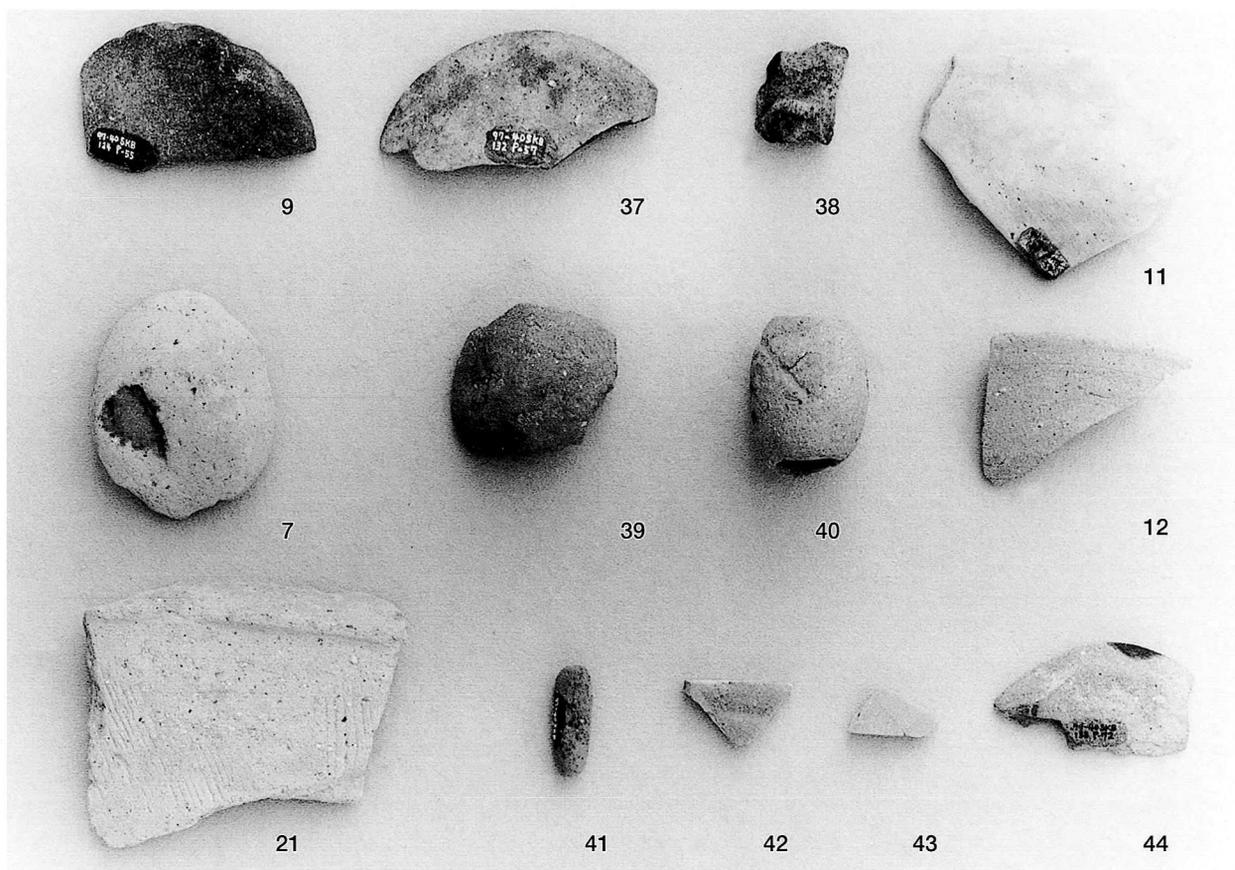


2. 同 上

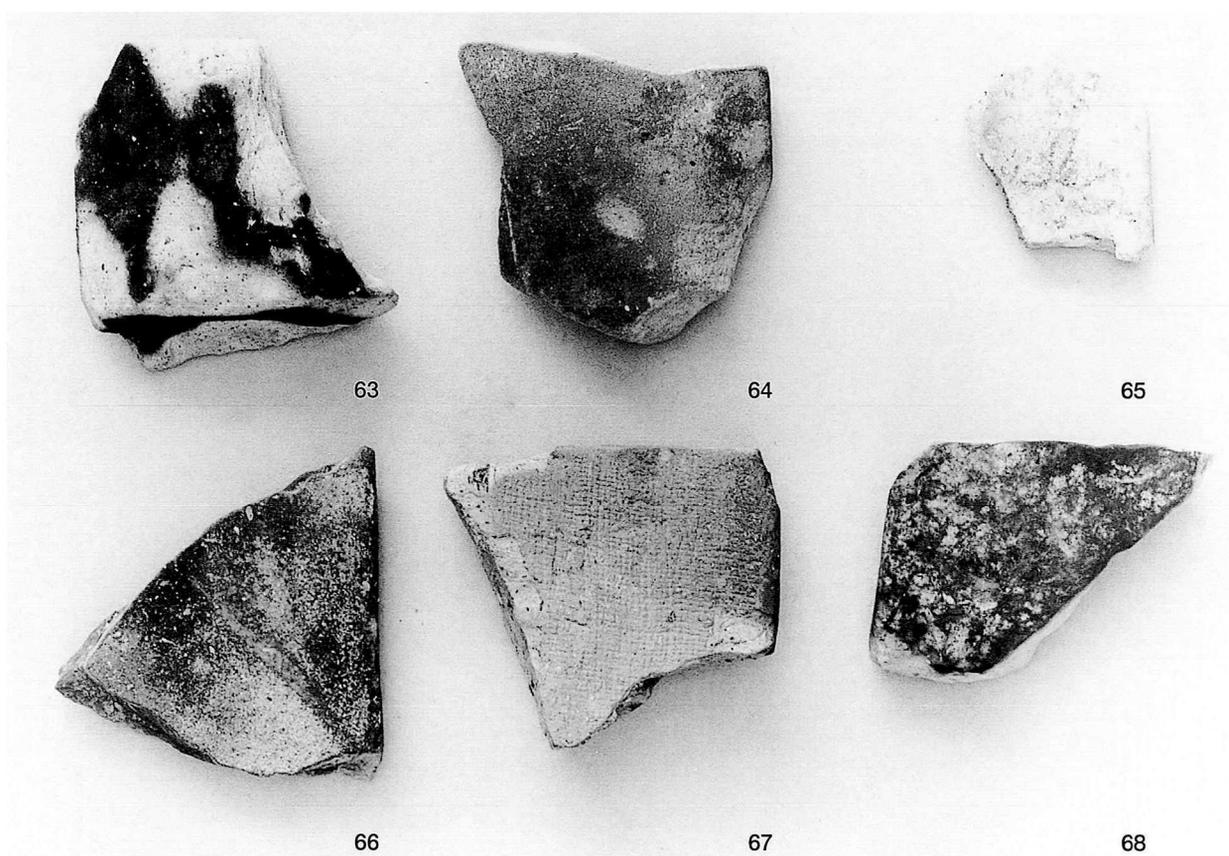
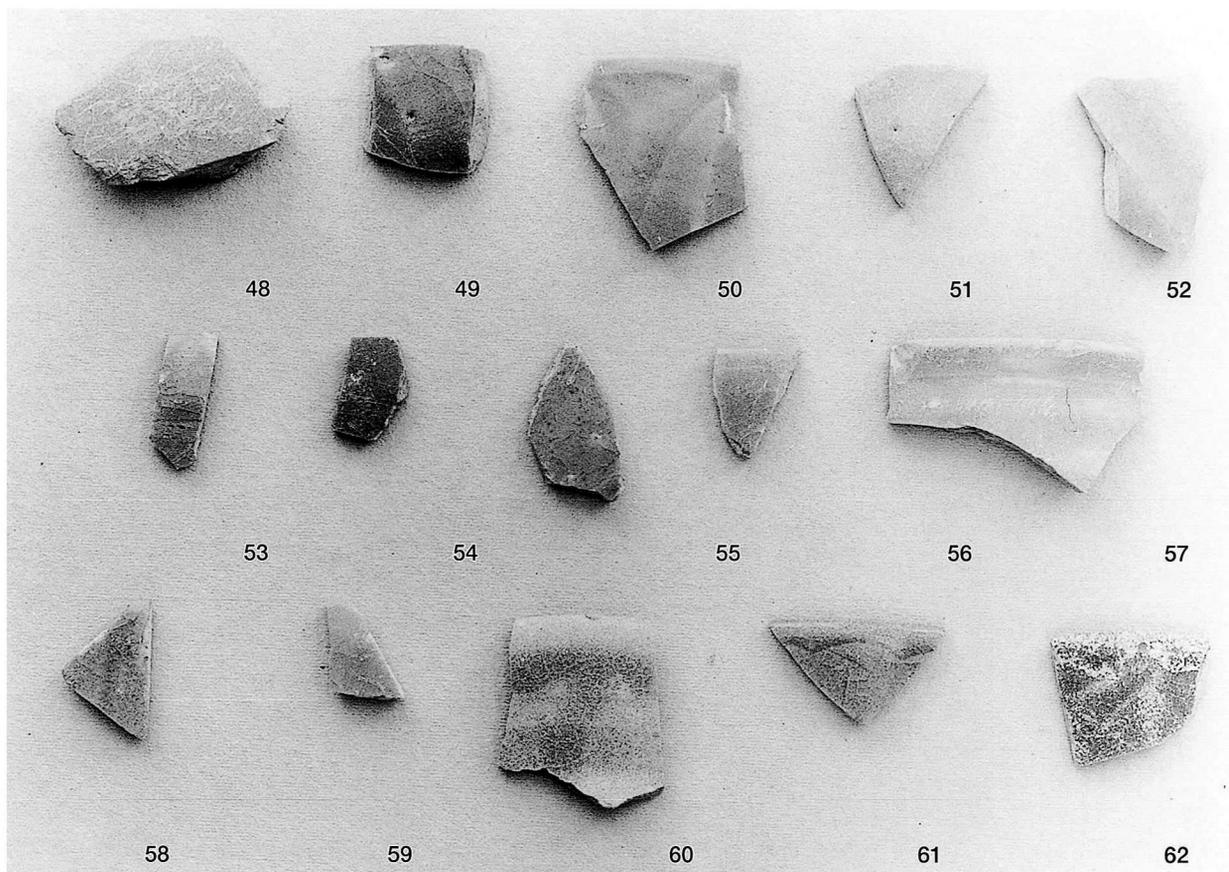
西より



上第4層 (27~34)、第5層 (8、35、36) 出土遺物



上第6層 (7、9、11、12、21、37~44)、第7層 (15、17、22、45~47) 出土遺物



上青磁 第2層(62)、第4層(57,60)、第6層(54~56,58,59)、第7層(49~53)第11層(48)、遺構検出時(61)。  
下瓦 SX-301(65,66)、SD-404(64)、SD-504(63)、第9層(68)、第11層(67)出土瓦

貝塚市埋蔵文化財調査報告 第52集

## 沢共同墓地遺跡発掘調査概要

発行日 1999. 3. 31

編集・発行 貝塚市教育委員会

大阪府貝塚市島中1丁目17番1号

印刷 摂河泉文庫(貝塚市北町20-18)